

(別紙様式3)

令和4年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 京都市中京区西ノ京東梅尾町1-7
管理機関名 学校法人 立命館
代表者名 理事長 森島 朋三

令和3年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年4月1日 ～ 令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 立命館宇治高等学校
学校長名 ヒックス ジョーゼフ

3 構想名

イノベーティブなグローバル人材育成を目指す教育システムの開発

4 構想の概要

AL ネットワークを組織し、Society 5.0 に向けてイノベーティブなグローバル人材育成のための教育システムを開発する。文理融合の学びの中で、グローバルマインドセット、グローバルコンピテンシー、PPDACの3要素を伸ばす『総合的な探究の時間』とその関連科目の『SDGs』等を開発する。各科目と連動して学びの効果を高める海外研修も開発する。海外研修や国際会議等を、生徒がチャレンジしやすく、効果的な研修となるよう、3要素等の到達度や目的・到達目標により分類する。また、選択科目群や講座群を置き、生徒の関心によって第2外国語や高度な学びができるようなカリキュラムを開発する。課題研究では、多様性を受容し協働できるグローバル社会の実現に向けて、SDGs の目標実現のために生徒全員が取り組む。その成果は国際会議で発表し、多様性の中での論議を通し新しい価値を創造する。

5 教育課程の特例の活用の有無

年間留学を必須とする IM コースにおいて、帰国後に、数学、理科、地歴、芸術、外国語をイマージョン教育で行う。IB 教育を日本の教育に活かすために、IB ディプロマと日本の教育課程を両方取得できるカリキュラムを実施、検証する。

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目		実施日程											
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
実施体制の整備	a1. AL ネットワーク構築・整備のための管理機関における体制整備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	a2. 拠点校および連携校における WWL 事業推進のための体制整備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	a3. 拠点校内に WWL 推進体制を置くことへの支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	a4. 関係各機関との調整	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b. 情報共有体制の確立	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	c. 法人担当部長および拠点校校長の役割	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	d1. WWL 運営指導委員会		○					○		○			
	d2. WWL 検証委員会							○		○			
	e. 卒業生の卒業後の進路追跡について										○	○	
	f. 留学生支援						○	○	○	○	○	○	
	g. 本事業により授業改善や教職員及び生徒の意識改革を促した状況	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
h. アジア高校生架け橋プロジェクト						○	○	○	○	○	○		
財政等支援	a. WWL 事業推進のための教職員加配	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b1. WWL 事業推進に向けた教員研修の実施と高大接続の強化	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b2. 教員海外派遣研修・立命館大学教職大学院派遣	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b3. 海外日本人学校への教員派遣	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	c. 継続的実施のための計画	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
AL ネットワークの形成	a. AL ネットワーク事務局会議及び AL ネットワーク推進会議	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b. AL ネットワーク情報共有体制と共同事業の開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	c1. 海外大学進学希望者支援・啓蒙				○	○	○	○	○	○	○	○	
	c2. 海外提携大学を活用した高校生留学プログラム、特にギャップイヤー留学の実施												
	c3. 英語トップアッププログラムの実施				○	○	○	○	○	○	○	○	
	d. 事務局体制及びカリキュラム開発の人材配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	e1. 高校生国際会議の開催状況			○	○						○		
	e2. 高校生国際会議の準備状況	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	f1. WWL 成果普及支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	f2. 成果発表研究会の開催、全国高校生フォーラムへの支援ならびに参画							○	○	○			
	g. 海外大学、海外中高、グローバル企業、研究機関などさまざまな提携先の紹介	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書	作成済み、随時締結実施											

(2) 実績の説明

学校法人立命館の一貫教育部や部内の教育研究・研修センターおよび総合企画部国際連携課、広報課、立命館大学国際部、キャリアセンター、立命館アジア太平洋大学（APU）との連携や協力のもと、以下の項目に取り組んだ。

【実施体制の整備】

a1. AL ネットワーク構築・整備のための管理機関における体制整備

法人内の附属校統括部門である一貫教育部に、カリキュラムアドバイザーを配置した。本年度のカリキュラムアドバイザーは、WWL 事業の法人内責任者として副部長が担当し、海外交流アドバイザーは、昨年度末に転出した前担当者に業務委託をし、引き続き担当をお願いした。

a2. 拠点校および連携校における WWL 事業推進のための体制整備

拠点校の教員定数について、WWL 推進のために 2 名の教員加配を継続した。法人内の連携校においては、3 校がスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けていたが、同時に、SGH 校であった 2 校にも、昨年度に引き続き、国際化推進のための教員定数の加配および支援体制構築を行っている。

a3. 拠点校内に WWL 推進体制を置くことへの支援

立命館宇治高等学校においては、WWL 事務局会議を校内の分掌の連携を推進する機関として設け、担当副校長を置いた。校長をはじめ担当副校長が率先して、この会議を通して情報共有を図るとともに、全体と協力して WWL 拠点校として AL ネットワーク構築を進めた。また、毎週の事務局会議には、立命館一貫教育部からも担当副部長であるカリキュラムアドバイザーと海外交流アドバイザーの 2 名が参加し、支援を行った。

a4. 関係各機関との調整

学校法人立命館一貫教育部が主管となり、文部科学省や大学、外部団体への問い合わせや相談をはじめ、さまざまな折衝・調整を行った。

b. 情報共有体制の確立

AL ネットワーク専用のメーリングリスト (連携 ML)、法人及び拠点校担当者間のメーリングリスト (事務局 ML) を設定、管理しており、様々な募集、報告、連絡に活用されている。特に、AL ネットワーク全体の ML ではすでに多くの情報が連携 ML 上で共有されている。また、Facebook 上に AL ネットワークのグループページを作り、運用している。各校が情報をアップロードして共有できる仕組みとなっており、グループメンバーも 70 名に達し、各校の実践や教育関連情報、海外研修の様子などが共有されている。

c. 法人担当副部長および拠点校校長の役割

いずれも、毎週の事務局会議に出席し、全体の進行を把握、管理した。適宜、法人のリソースの紹介、人材育成のための研修等を行った。また、新規の連携校や企業、団体には、法人の担当副部長や拠点校校長あるいは副校長が、AL ネットワークへの参加を依頼した。

d1. WWL 運営指導委員会

<構成> 一貫教育部および立命館宇治高等学校を事務局とし、以下の委員 (敬称略・順不同) に継続いただいた。

二宮 皓 広島大学名誉教授

飯吉 透 京都大学 理事補 (教育担当) ・高等教育研究開発推進センター長・教授

兼任：大学院教育学研究科教授 (高等教育開発論講座)

神居文彰 平等院 住職

川上全龍 妙心寺塔頭春光院副住職 慶応大学研究員

The Fellow of the U.S.-Japan Leadership Program by the U.S.-Japan Foundation

小関道幸 株式会社ソーシャルプロデューサー代表取締役会長

浮田恭子 宝塚大学看護学部准教授、元立命館小学校校長、元立命館宇治高等学校副校長

村井尚子* 京都女子大学准教授

山下真司* リクルートキャリアガイダンス編集長

大森順子* 大阪大学大学院大学院生、元百合学院進路指導部長

小村俊平* OECD 日本イノベーション教育ネットワーク事務局長

<内容> 実施状況報告・効果検証・今後の計画へのアドバイス等

今年度は、*のカリキュラム関連の先生方には、5 月、11 月と 1 月の 3 回、*以外の先生方には 1 月の 1 回、対面を中心としながら、オンラインでも参加できるハイブリッド型で実施をし、貴重なご指導・ご助言をいただいた。ハイブリッドにしたことで、参加率が高く、また意欲的なご助言もいただき、コロナ禍を機会として新しい実践の在り方について示唆に富んだご指摘いただいた。また、上記*の委員の方には、上記の他に、質問紙開発やカリキュラム開発等について別途個別の指導助言をいただいた。

d2. WWL 検証委員会

＜構成＞一貫教育部および立命館宇治高等学校を事務局とし、以下の委員（敬称略・順不同）に継続してご指導・ご助言をいただいた。

花田真吾 東洋大学国際学部グローバル・イノベーション学科准教授

影戸 誠 日本教育工学会国際担当理事，同国際交流委員長，日本福祉大学（客員教授）

河井 亨 立命館大学スポーツ健康科学部准教授

＜内容＞

検証を進めるための指標等の検討と生徒アンケート実施，その際の分析方法，卒業生の追跡方法等に関するアドバイスをいただいた。今年度は，昨年度に引き続き，新型コロナウイルス感染拡大防止の観点もあり，運営委員会と合同での開催となったが，別途個別ご助言をいただいた。

e. 卒業生の卒業後の進路追跡について

拠点校における社会に出て以降の卒業生の追跡調査は，学校同窓会との連携課題としては，継続課題としたい。ただ，文部科学省委託調査として卒業生アンケートを実施されるので，その内容や結果を参考にし，本学でも検証していきたい。

f. 留学生支援

拠点校においては，国際センター内に日本語教員を配置。生徒組織国際委員会による留学生をケアできる体制を作っている。寮においても，留学生サポートのために英語のできる教員を定期的に派遣し，留学生の状況把握，学習サポートに努めている。ただ，今年度は昨年度に引き続き，新型コロナウイルス感染拡大防止のため留学生受入は「アジア高校生架け橋プロジェクト」のみ受け入れをした。アジア高校生架け橋プロジェクトは，10月より3月まで受け入れた。

g. 本事業により授業改善や教職員及び生徒の意識改革を促した状況

拠点校においては，「コア探究」，「GLS」，「TOK」などの探究の学びを全学年で実施しており，各学年の全担任がこの科目を担当する。このことにより，探究的学習の進め方への見識が広がり，各教科においても実践が進められるようになってきた。特筆すべき点は，学年の教科担当教員が「なぜ学ぶのか」を語ることで，教科教育にも影響を与え，カリキュラムマネジメントの考え方が広がったことである。

全国高校生 SR サミット参加のメンターから，高校生の力を再認識し，社会全体で教育を進める重要性に気が付いたという感想を多くいただいた。このことが，企業や団体の AL ネットワークへの加入，協力を促し，教員が社会とのつながりの重要性に気付く好循環となった。

また，1月21日・22日に WWL 研究報告会を実施し，対面とオンラインでのハイブリッドでの開催をすることで，多くの参加者を得て，拠点校の教職員の授業改善や意識改革を図るだけでなく，広く全国に輪を広げた。

h. アジア高校生架け橋プロジェクト

立命館宇治高等学校では，10月より3月まで，パキスタン，ネパールから各1名，合計2名を受け入れた。2名は Global Youth Fair への参加等，本校生徒の学びに大きな影響を与えてくれた。

【財政等支援】

a. WWL 事業推進のための教職員加配

拠点校の教員定数について，WWL 推進体制に留意し国際化推進のための2名の教員加配を継続した。次年度以降も，教員定数に国際化推進のための加配を継続する予定である。

b1. WWL 事業推進に向けた教員研修の実施と高大接続の強化

立命館一貫教育部に置いた「附属校教育研究・研修センター」の主催で，新任研修（年間9回）や教科別研修，ミドルリーダー研修などを幅広く実施し，優れた教育実践や理論から学ぶ機会を継続して提供してきた。新型コロナウイルス感染拡大防止のための措置によりオンラインでの実施となるが多かったが，これらの機会を通して，オンラインでの授業方法に関する見識を深め，ICTを活用したアクティブ・ラーニングや PBL 型授業等について知識を深めることと共に今までになかった教育活動の検討とチャレンジをすることができた。

また，立命館大学の学部や各学部と連携し，特に課題研究の推進のために大学教員が相談に乗ったり，研究成果発表会に大学の教職員が参加したりし，高大接続の強化を図った。

b2. 教員海外派遣研修・立命館大学教職大学院派遣

教員が年間で海外や大学院で研修に専念できる「研修員」制度を持っている。各校の，主に英

語科以外の教員が英語力やグローバルコンピテンシーを獲得できるように短期（4 週間以内）海外研修を一貫教育部の予算で継続して実施しているが、今年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の影響で派遣できなかった。ただ、最新の教育理論について学び、教科指導力の向上を目的とした立命館大学教職大学院での有給研修（2 年間）は継続しており、立命館宇治中高からは 1 名の教員が参加している。

b3. 海外日本人学校への教員派遣

シンガポール日本人学校への教員派遣を実施しており、今年度で 3 年目となる。海外の帰国生教育の到達点、現地の教育事情から多くを学ぶことのできる機会として、今後も教員の派遣を実施する予定で、次年度は数学科の教員が派遣される予定。

c. 継続的実施のための計画

我が国の教育全体のグローバル化を牽引することは、社会貢献をめざす本法人のミッションでもある。本学園の長期計画である「R2030」では高校と大学の接続教育における探究学習の継続をテーマとした取組が謳われており、上記の海外派遣等の取組を継続して行うこととしている。また、AL ネットワークにおいても「自走」のための意見交換がなされ、その実現に向けて具体化していきたい。

【AL ネットワークの形成】

a. AL ネットワーク事務局会議及び AL ネットワーク推進会議

法人と拠点校担当者間の事務局会議、国内事業連携団体を含む推進会議を継続して実施している。事務局会議は、週 1 回のペースで会議を開催し、十分な情報共有と計画が行われた。

AL ネットワーク推進会議では、各校、連携企業・機関の情報を発信・共有し、互いの教育活動を高め合うことができた。また、WWL カリキュラム開発拠点校として文部科学省からの予算措置最終年であるため、総括及び今後の発展についての議論が行われた。

b. AL ネットワーク情報共有体制と共同事業の開発

上記「実施体制の整備」b に記載したように、情報の共有体制を整備している。共同事業として、オンラインを活用し、ラオス研修とフィリピン研修を共同事業で実施することができた。また、立命館アジア太平洋大学の国際学生とのディスカッション企画も定例化してきている。海外生も含めた高校生国際会議もオンラインで参加することができた。また海外インターンシップを展開している Tiger Mov と連携校共同の課外活動の位置づけで、オンライン・グローバル PBL プログラム「FLAG」を実施した。

特筆すべき点は、全国高校生 SR サミット FOCUS において、事前のリーダー合宿を連携校が分担したことにある。AL ネットワーク全体で作り上げていこうという機運が広がったことである。

c1. 海外大学進学希望者支援・啓蒙

この間、立命館大学の、オーストラリア国立大学 (ANU) と共同したグローバル教養学部 (GLA) や、アメリカン大学との共同学位を得ることができる Joint Degree プログラムを持つ国際関係学部とも連携し、海外で学ぶことの意義を伝え、海外大学への進学や留学を希望している生徒への啓蒙を実施した。特に、下記に挙げる「英語トップアッププログラム」参加者への啓蒙に重点を置きつつも、また、その他の生徒にも、海外の NPO と連携し、一貫教育部主催で「立命館トップグローバルスクールズ講演会」をオンラインで実施し、生徒の主体的な意欲を高める取組を行った。

c2. 海外提携大学を活用した高校生留学プログラム、特にギャップイヤー留学の実施

今年度も、コロナ禍の影響により、例年、実施してきた高 3 の 1 月から 3 月にかけて立命館大学の協定大学のカナダのブリティッシュコロンビア大学 (UBC) での 3 か月の English Intensive Program や、同じく立命館大学と学生交換協定を結ぶアイルランドのダブリン・シティ大学 (DCU) での 1 月から 4 週間の英語集中プログラムは、実施できなかった。

c3. 英語トップアッププログラムの実施

学校法人立命館一貫教育部が主宰し、立命館附属校に所属する生徒（英語の成績で一定基準を超えた者）を対象に、英語力の一層の向上を目的として、TOEFL iBT®テスト受験に向けての講座を実施した。立命館大学の GLA や国際関係学部の協力を得、オンラインで夏季休業期間、2 学期の隔週土曜日、春季休業期間に行い、高校生の意欲を高める工夫をした。

また上記英語基準に到達できるように、今年度より中学生も参加できるようなスコアアップ講

座も設け、早期からの仕組みを作った。

d. 事務局体制及びカリキュラム開発の人材配置

法人の一貫教育部の副部長が、WWL の責任者として、毎週の WWL 事務局会議にも参加し、WWL の取組をより効果的にするために、教育課程の編成や AL ネットワークの拡大においても、各種助言を行った。また、各運営指導委員会の先生方や検証委員会の先生方とも意見交換を行い、ご助言をいただいた。

e1. 高校生国際会議の開催状況

2021 年度もオンラインをベースにした企画となったが、拠点校の立命館宇治高等学校が主催するものでは、7 月・8 月には「全国高校生 SR サミット (FOCUS) 2021」、2 月に Global Youth Fair (GYF) を開催、管理機関の法人主催として World Youth Meeting を 8 月に開催した。

FOCUS には国内校 45 校、海外校 5 校の生徒達、および APU の学生や AL ネットワークの連携企業・団体からの参加を得て高校生たちがお互いの社会課題の解決に向けてのプロジェクトを議論のなかで、お互いに高めあった。また、今年度は事前にリーダー合宿 (オンライン)、FOCUS WEEK を設けるなど、意識を高める工夫を行い、1 月には「AFTER FOCUS」として、その後のプロジェクトの進捗状況や課題を共有し、お互いが持つ社会課題への認識を深めるとともに各プロジェクトの社会実装に向けての方策を出し合った。

GYF には国内校 13 校、海外校 15 校の生徒達、および AL ネットワークの連携企業・団体からの参加を得て、高いレベルのグローバルリーダーの育成を目指すとともに真の国際協力関係を 10 代のうちから作ることに繋げた。

その他、12 月には模擬国連をオンラインで開催、立命館高等学校主催 Rits Super Global Forum (RSGF)、12 月に Asian Student Exchange Program (ASEP)、2 月に宮崎大宮高等学校主催ウインターサイエンスプログラムに、AL ネットワークの連携校とともにオンライン参加した。

e2. 高校生国際会議の準備状況

2021 年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインでの実施をベースに準備をしたが、昨年度の経験もあり、予定をしていたすべての国際会議について、その可能性をより追求した形で実施することができた。生徒にとっても教員にとっても、対面実施とオンライン実施の両方のケースを想定しながらの準備であったため、手間と労力がかかる面はあったが、生徒の成長をはじめとして成果も大きかった。これらのことを経験値に変え、次年度以降の実施体制などについて活かしていきたい。

f1. WWL 成果普及支援

学校法人立命館広報課等の協力を得て、ホームページを中心に広報に努めるとともに、Facebook に AL ネットワーク推進連絡用のページを設け、WWL 研究開発に関するリンクを貼りやすいようにしたりして、WWL 成果の普及に努めている。研究報告会をハイブリッド方式で実施し、オンラインで 300 名の参加者があった。また、テレビ東京の The 名門校に、拠点校の立命館宇治高等学校だけでなく、連携校の福岡雙葉高等学校、青翔開智高等学校、市川高等学校がそれぞれ単独で取り上げられた。

f2. 成果発表研究会の開催、全国高校生フォーラムへの支援ならびに参画

11 月 12 日に公開研究会、1 月 21 日・22 日に WWL 研究報告会を実施し、対面とオンラインでのハイブリッド型で実施をし、多くの参加者を得た。また、12 月 19 日に実施された文部科学省主催「全国高校生フォーラム」への参加についても支援を行った。今年度は、立命館宇治高等学校の生徒が文部科学大臣賞を受賞した。

g. 海外大学、海外中高、グローバル企業、研究機関などさまざまな提携先の紹介

昨年度までは、Inspire High、ハワイ州観光局、Learning in Context、アシックスジャパンなどの AL ネットワーク参加にかかわってきたが、本年度は Global Youth Fair 参加の可能性のある学校を立命館アジア太平洋大学から紹介したが、本年度の参加には至らず、次年度以降につなきたい。

h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書

すでに 2019 年度に AL ネットワークの連携校や連携企業・団体との間で締結する、「WWL コンソーシアム構築支援事業 AL ネットワークについての覚書」、また、連携校間での「WWLAL ネットワークの海外研修引率体制について」、各研修での参加生徒・保護者を対象とした「立命館 AL ネットワーク〇〇〇(研修名)に参加するにあたっての確認事項」および「参加誓約書・保

「保護者同意書」について確立しており、運用を行っていて、Web ページでも公開している。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

下表は事業計画書の項目に従って分類したが、事業実施完了報告書（本文書）7(2)にある項目のアルファベットを付記し、項目への対応を明確にした。

業務項目	実施期間（契約日 ～ 令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
【1】(1)AL ネットワーク構築 bgh		○	○	○				○		○	○	
【1】(2)関連機関情報共有 bg	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
【2】(1)①②コア探究Ⅰ・Ⅱ， CSL 他 授業改善 bcd fgh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
【2】(1)③コア探究Ⅲ・SDGs2 他 授業実践 bcdefgh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
【2】(1)①②③にかかわるプロジェクト等 fh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○	○	○	○		○	○	○	○	○
【2】(1)④⑤令和2年度カリキュラム・高大連携構築 befg	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○				○			○		
【2】(2)WYM・ASEP ④ 模擬国連 Cfgh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		○	○	○	○	○	○	○	○			
【2】(2) 海外研修充実と協働プロジェクト創出 bdf	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	ラオス			○	○	○	○	○	○	○		
	フィリピン					○	○	○	○	○	○	○
【2】(2)Global Youth Fair 開催	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
					○	○	○	○	○	○	○	
【2】(2)SR サミットの充実と実施 Befgh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
【2】(2)国際会議や海外研修の分類 Bef	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
				○				○		○		
【2】(2)連携校の取組のサポート Bfgh	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
【2】(3)ISN2.0 bcefg	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
【2】(4)留学生増加 i	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	○					○	○	○	○	○	○	○
【2】(5)研究会・研修会 bf	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		○					○	○	○	○		
【2】(5)検証・検証委員会	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		○	○			○	○	○		○		

(2) 実績の説明

管理機関と拠点校、連携機関が協働で行ってきた WWL 研究開発の取り組みは以下の通りである。

【研究開発・実践】

a. 生徒課題研究に設定したテーマ

「SDGs 実現に向かってアクションを起こそう

～Diversity and Inclusion～ 多様性を受容し協働できるグローバル社会の実現に向けて」

高校生が AL ネットワークを活用しながら、多様な背景を持つ者が互いを尊重しあって協働する仕組みを構築し、世界と日本の 10 代がグローバル社会の一員として SDGs、特に貧困や教育問題を中心とした様々な課題の解決に向かう社会の実現を目指した。

テーマにあるように、アクションを起こすことを前提としており、IM コース Global Leadership Studies.においては、オンラインで実施したラオス研修とリンクするなどして、実際にアクションを起こした。昨年同様に、コロナ禍でアクションに従来の手法が取れないため、今まで以上に知恵を絞る必要があった。複数のチームがクラウドファンディングを成功させ、途上国の支援する生徒の学びを継続させることに成功している。3 年間の WWL の学びの総決算として、IM コースの生徒中心に国際会議が企画され、IG コースの生徒も巻き込んで成功させた。

IG コースでは、課題研究のための国内フィールドワークを昨年度よりは行なうことができた。そのため、昨年以上に各自のテーマに沿って身近なところからの課題解決に取り組むことができた。また、フィリピン研修に高校 1 年で参加した生徒の中から連携校の生徒とともに、新しいプロジェクトも生まれようとしている。

また、隣接する宇治市植物公園活性化プロジェクトなど、本年度も地域と連携する取り組みが行われた。学校設定科目の SDGs では、身近な SDGs に向けた改善を提案し、実行に移し、報告にまとめた。文科探究などでも、映像作成を通して、探究活動を深めることができた。具体的な授業内容は、**研究報告書第 2 章 5 および 6**に記載した。

これらの成果として、3 件の日本一が誕生している。詳細は**8.目標の進捗状況、成果、評価**に記載した。

b. 大学、企業、国際機関と協働で行ったカリキュラム開発

<AL ネットワーク推進会議による大学、企業、国際機関との協議>

AL ネットワーク推進会議は、大学、連携校を含む AL ネットワーク参加団体代表者による会議である。本年度は 1 回の対面会議が行われた。この会議の中で、各団体から、共有できるリソースの提案、拠点校や連携校の取り組み共有などが行われ、それをベースに国際会議、海外研修、新しいプロジェクト等が議論された。また、次年度以降の予算措置終了後に向けての検討が行われた。国際会議関連も含め、生徒の学びを止めないために、ほぼすべての取り組みがオンライン化される中で、全国的にオンラインスキルがアップし、新しいステージに向かい土壌ができた。また、オンラインのメリット・デメリットも明確(**令和 2 年度研究報告書第 5 章 2 (4)**)になり、今後の授業や研修のあり方についても論議できた。

これ以外の協議については、ML 等を通じての確認のほか、必要に応じて企画参加関係者を中心とした実行委員会等が行われた。

<海外研修、FLAG、MUN ほか>

ラオス研修は連携機関の IC ネット株式会社とともに、フィリピン研修は認定 NPO 法人アクセスとともにオンラインで実施した。また、FLAG という新しい学びの形を Tiger Mov とともに構築することができた。MUN や APU 学生とのディスカッション企画には、立命館アジア太平洋大学 (APU) 学生の派遣に協力を受けた。詳細は、**第 4 章 4 および 5**に記載した。

<World Youth Meeting (WYM)>

WYM は協働機関である内田洋行の支援のもと行われている。本年度は、一般社団法人化に際しても支援を受けた。内田洋行は、長年実行委員の一員にもなっており、運営面でも協力を受けている。また、学校法人立命館が主催の一員になっており、管理機関が運営面等に参画した。詳細は**第 3 章 3 (1)**に記載した。

<全国高校生 SR サミット FOCUS>

日本国内もしくは海外の同世代高校生を集め、各生徒および学校が産み出したプロジェクトをブラッシュアップする機会として、第 4 回全国高校生 SR サミット FOCUS を開催した。昨年度は経団連の提言にもこのイベントが言及されるほどに成長しているが、本年度も以下のような挑戦を新たに行った。また、メンター、事前の講演会 (FOCUS WEEK)、リーダー合宿など、様々な場面で協働機関の皆様に協力いただいた。

本年度の参加校は、国内外 50 校 111 プロジェクト 460 名で、メンターとして 39 団体 65 名に協力いただいた。また、海外連携校の参加も受け、19 プロジェクトが英語での議論とし、全体会も日本語と英語のハイブリッド形式で行った。

○改善点：各プロジェクトのリーダー層が会の趣旨を理解して積極的にふるまい、本番での議論がスムーズかつ効果的になるように、各校のプロジェクトリーダーのみ参加のリーダー合宿を全国 4 会場で行い、各会場において協働企業および連携校に運営協力をお願いした。

新たなオンライン媒体への挑戦として Miro, oVice などを活用した。

○リーダー合宿担当

九州会場：福岡雙葉高等学校・ファシリテーター：中村様（タイガーモブ株式会社）

関西会場：立命館宇治高等学校・ファシリテーター：長井様（タクトピア株式会社）

関東会場：市川高等学校・ファシリテーター：木村様（一般社団法人グローバル

教育推進プロジェクト（GiFT））

海外会場：立命館宇治高等学校・ファシリテーター：芦田様（アイ・シー・ネット株式会社）

メンター管理：空田様（Learning in Context）

○FOCUS WEEK

7月14日（水）杉浦様（株式会社 Inspire High）

7月18日（日）長井様（タクトピア株式会社）

7月21日（水）杉浦様（株式会社 Inspire High）

7月23日（金）山本様（ミネルバ大学 元日本事務局長）

7月28日（水）渋谷様（株式会社リクルート Ring 事務局長）

詳細は、別冊研究報告書第3章3(2)に記載した。

＜Global Youth Fair (GYF) “SURVIVE!”＞

昨年度は、全国高校生 SR サミット FOCUS と合同開催の形をとったが、本年度は単独で開催し、構想計画書に示した通り、本校が主催にかかわる3つの国際会議の最高峰として、企画から運営まで生徒が主体となる取り組みとして実施し、会議の最後に共同宣言を発出した。運営メンバーは、コアになる生徒7名と当日の運営にかかわる生徒36名。コアになるメンバーは、海外研修、海外校主催の国際会議、拠点校主催の国際会議や企画に積極的に参加しており、WWLの3年間の学びを体験した高校3年生で、まさに学びの集大成を発揮する形となった。そのほか、メンター13名、スペシャリスト（専門家）3名、キーノートスピーカー1名関わっていただいた。

SDGsの到達年である2030年に、目標が達成されていなかった状況を想定し、そこからバックキャスティングで問題点を洗い、2030以降により良い世界が訪れるように自分たちの行動指針を示すというコンセプトで計画された。

会議日程は以下の通り。

2022年2月13日（日）開会式

2022年2月14日（月）-18日（金）グループCでブラッシュアップ（Slack と Zoom で）

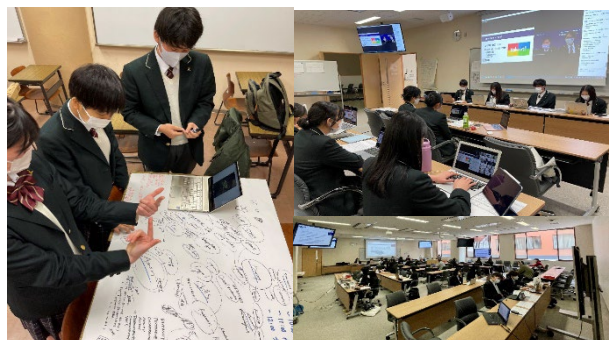
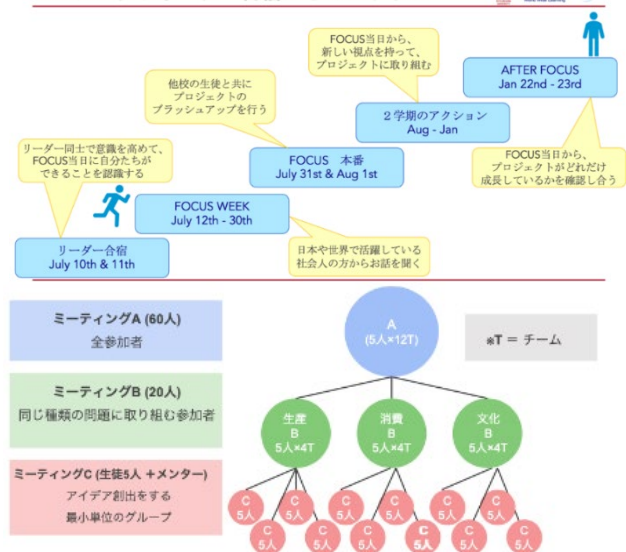
2022年2月15日（火）交流会

2022年2月19日（土）イベント2日目

2022年2月20日（日）イベント最終日

会議に出席する生徒数は、初回の取り組みであることと、オンラインでも実質的な議論が成り立つように、全体で60名程度に抑えた。右図にあるミーティングCが基本となる単位で、1グループを5名とし、ここにメンター及び運営スタッフを加えて実質的な議論を行った。正式な会議日程は3日間であるが、機動性の高い小グループは、会議間の1週間で独自に議論を深めていった。Cで検討した案はBで共有され、専門家の意見や他グループの意見をもとに修正され、再度共有された。各グループでの議論を共有するため

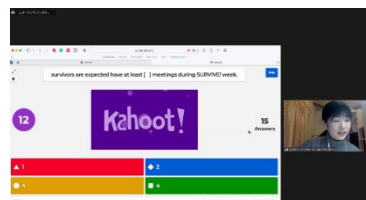
プロジェクトリーダー合宿からのステップ



Slack が使われ、さまざまな連絡事項も Slack 上に一元化された。この過程で、大会宣言についても意見交換が行われていき、会議と並行して、実行委員会の担当生徒が集まった意見をもとに宣言案を作り上げ、最終的に A で決議された。

テーマは食の問題にフォーカスし、B グループのそれぞれを Culture, Production, Consumption の3分野に分けて議論することにした。事前に、参加者自身の出身国や地域の課題、もしくは興味を持っている課題についてまとめ、その解決策になることを考えておくことを求めた。

日程を簡素にする一方で、他の C グループの生徒とも仲良くなるために交流会が平日の夜開催された。オフラインの場合は、食事の時や休み時間に知らない生徒同士が話をして仲良くなる機会があるが、オンラインではそのような機会がない。実質的な議論だけではなく、このような要素がオンラインでは特に必要であることを実行委員は感じていたためである。



交流会の様子

参加校一覧

【国内】13 校 32 名

- ・立命館宇治高等学校 8 名 (アジア架け橋プロジェクトの留学生(パキスタン)を含む)
- ・立命館慶祥高等学校 2 名
- ・立命館高等学校 2 名
- ・金沢大学附属高等学校 2 名
- ・長崎県立長崎東高等学校 2 名
- ・聖光学院高等学校 1 名
- ・大妻中野高等学校 2 名
- ・宮崎県立宮崎大宮高等学校 2 名
- ・青翔開智高等学校 2 名
- ・福岡雙葉高等学校 2 名
- ・愛媛大学附属高等学校 2 名
- ・愛媛県立三崎高等学校 2 名
- ・東明館高等学校 2 名

【海外】6 か国・地域 7 校 (15 校) 27 名

- ・Sansin High School of Commerce and Home Economic (台湾) 2 名
- ・SMK (P) Sri Aman (マレーシア) 3 名
- ・St. Clare's Girls' School (香港) 4 名
- ・NGS Preah Sisowath High School (カンボジア) 3 名
- ・Philippine Science High School System (フィリピン) 9 名 9 キャンパス(9 校)から 1 名ずつの参加
- ・Leyte Normal University, Integrated Laboratory School (フィリピン) 3 名
- ・Nanyang Girl's High School (シンガポール) 3 名

行動指針としての大会宣言は以下の通り。



SURVIVORS PROFILE

6 things we gained in SURVIVE!

COMMUNICATION
PERSPECTIVE
KNOWLEDGE
EMPATHY
RESPONSIBILITY
CAPABILITY

COMMUNICATION

THE ABILITY TO DISCUSS, COLLABORATE, AND SHARE THAT ALLOWS FOR BRINGING TOGETHER A DIVERSE GROUP OF PEOPLE

PERSPECTIVE

EXPANDED POINTS OF VIEW BY COMMUNICATING WITH PEOPLE OF DIFFERENT BACKGROUNDS AND TO BE CURIOUS

KNOWLEDGE

AN UNDERSTANDING OF GLOBAL ISSUES, GAINING NEW PERSPECTIVES WHICH INCREASE AN AWARENESS OF THE ISSUE

EMPATHY

BRINGING OURSELVES TO THE SITUATION OF THE PROBLEM HAPPENING AND MAKE IT TO OUR PERSONAL PROBLEM.

RESPONSIBILITY

BEING ACCOUNTABLE FOR THE PRESENT AND FUTURE SOCIETY

CAPABILITY

NEW SKILLS GAINED, SUCH AS CREATING NEW IDEAS AND WAYS THINKING ACT TOWARDS GLOBAL ISSUES.

詳細は、研究報告書第2章3(4)に記載した、また、実行委員会の計画段階で、全国高校生フォーラムにおいて文部科学大臣賞を受賞した。

<コア探究>

本年度も様々な外部機関の協力により、探究の学びと生徒のプロジェクトが実行された。マイプロジェクト in 宇治の開催など、外部機関との連携により、生徒の探求活動が評価を受ける場を作った。特にキャリア形成と密接に結びついた探究カリキュラムを作るために、高大接続の視点は欠かせない。授業の運営は担任が中心となり、キャリア教育部と学年会が連携し手授

業づくりを行ってきた。課題研究においては、各団体や大学の協力、また、アウトプットの場における研究の評価など、様々な連携が行われた。コア探究については、令和元年度完了報告書に詳述した。本年度実施の取り組みは別冊コア探究実施報告書において詳述した。

<Global Leadership Studies (GLS)>

GLS も、コア探究同様に IM コースにおける総合的な探究の時間の位置づけである。

高校 1 年第 1 ステージでは、日本文化再発見として、地元商店街等の協力を得てのフィールドワーク、商工会議所の協力で地元宇治を知る活動、協働機関の Learning in Context による日本再発見ビデオ作り、Inspire High には自己内省と言語化のために同社のプログラムなどが行われた。高校 2 年では、協働機関を含むグローバルに活動する団体や会社とともに学びの場を構築した。

GLS 第 2 ステージは、コロナ禍での留学期間の変更等で不規則な開催となったが、実施内容は以下の通り。各講師の先生とは、講演者としてだけでなく、全体の中での講義の位置づけ、講演の内容と振り返りを含め、十分な相談の上で行った。

- 05 月 17 日 (火) 高校 2 年留学前 難民を助ける会(AAR) 堀尾麗華氏
開発途上国での支援の現状を知り、国際協力の本質について学ぶ
- 06 月 15 日 (火) 高校 2 年留学前 動物福祉団体 Pawer. 大西結衣氏 Japan Cat Network Susan Roberts 氏
日本の動物福祉の現状から命の尊さを考える
- 06 月 28 日 (火) 高校 2 年留学前 環境保護団体 The Sea Cleaners Hayden Smith 氏
海洋プラスチックごみを除去する活動家のお話から、環境保全のあり方について考える
- 07 月 20 日 (火) 高校 2 年留学中 海外大学進学者講演会 UBC 卒 高垣氏
海外大学へ進学した卒業生から、後輩に進路についてのアドバイス
- 07 月 23 日 (金) 高校 2 年留学中 Native Mind 白川寧々氏 (協働機関タクトピア共同創業者)
自由な生き方を手に入れるために、海外大学進学を考えてみる。
- 07 月 24 日 (土) 高校 2 年留学中 海外大学進学者講演会 UC Berkley 在学中 中村氏・藤氏
海外大学へ進学した卒業生から、後輩に進路についてのアドバイス
- 11 月 08 日 (月) 高校 1 年留学前 立命館・アジア太平洋大学学長室 伊藤課長
留学中には一体何を学ぶべきか
- 11 月 22 日 (月) 高校 1 年留学前 LGBTQ+ 性の多様性について知ろう
- 12 月 06 日 (月) 高校 1 年留学前 クロスフィールズ①
最先端の ICT を用いたダイバーシティとインクルージョン授業
- 12 月 13 日 (月) 高校 1 年留学前 クロスフィールズ②
- 02 月 02 日 (水) 高校 2 年留学中 立命館アジア太平洋大学学長室 伊藤課長
留学の意味と締めくくり方について考え直す。
- 1 月 26 日 (水) 高校 2 年留学中 立命館大学グローバル教養学部学部長前川一郎教授
進路とは何か。進路選択のために今何をしておくべきなのか。

第 3 ステージ (高 3) においてもフィールドワークやアクションを起こす準備、論文の作成、発表の場において、前年同様にアドバイスや評価を、各連携団体の協力を得た。授業内容の詳細は研究報告書第 2 章 7 に詳述した。

c. 外国語を用いて行う文理融合探究科目のカリキュラム開発

<IB コース>

昨年度同様、IB コースのディプロマ取得のための学びは 1 学年 1 月から 3 学年 11 月の約 2 年間とした。拠点校ではほぼすべての IB 科目を英語ネイティブ教員が、一部の科目を英語で授業ができる日本人教員が行っている。日本の教育課程の科目に読み替えが可能な科目については、英語ネイティブであっても臨時の助教諭免許が取得した教員が担当している。この期間以外は、日本の高校を卒業する要件を満たすために、国語総合、世界史 A、日本史 A、現代社会、科学と人間生活、生物基礎、美術 I、体育、保健、家庭基礎などの授業が行われている。

<IG コース>

IG コース 2 年生および 3 年生の選択科目として、SDGs が設置された。本年度は 2 年生で 2 クラスが、3 年生で 1 クラスが開設され、英語ネイティブ教員 2 名が担当し、イメージングにより授業が行われた。

2 年生の授業では身近な課題発見から開始された。主な内容は以下の通り。1 年生と 2 年生のシラバスは令和 2 年度完了報告書に記載済。

- ・ SDGs の概要
- ・ SDGs の目標の中で最も興味のあるものについて調べ、発表させた。

- ・身近な課題を発見し、解決法を提案し、可能な限りアクションに移させた(プロジェクト)。
- ・計画段階とアクション段階でプレゼンテーションをクラス内で行い共有させた。
- ・課題発見からアクションまでは、年度で2サイクル行った。

3年生の授業では、昨年以上の社会とのつながりを考え、探究の舞台を校外にまで広げていった。3年のシラバスは次の通り。授業内容の詳細は、**研究報告書第2章6**に掲載した。

高校3年 SDGs II シラバス

Jr Sr	Course	Year	Credits	Dept.	Course title	Main textbook	Supplementary textbook					
Sr	SDG studies	3	4	Eng.	SDG studies	News Articles	None					
Goals		*Students will create, plan and implement projects to lead our school and community closer to achieving the SDGs (or continue existing projects that were started last school year. *Students will gain their own awareness and promote awareness of the SDGs in our school and community. *Students will learn to think critically about the pros and cons of various policies surrounding environmental, economic and social problems and issues. *Students will show responsibility as future leaders. *Students will assist the 2nd year students with advice about their projects. *Students will commit to volunteer activities and community service this year and beyond.										
Aspects of Evaluation		Knowledge and skills		Ability to think, to judge, to express		Motivation toward learning		Test schedule				
		*Planning and executing projects based on the 17 SDGs. *Reflection on the above projects. *Participation in volunteer activities outside of class (not explicitly evaluated, but encourage)		*Presentation of ideas (projects) to their class and grade members. *Understanding of government and non-government institutions. *Knowledge of current events.		Attitudes to learning: ● Communication ● Working together ● Organization ● Commitment to success ● Reflection				Mid	Final	Coursework
								1 st term	X	X	100	
								2 nd term	X	X	100	
Evaluation Method		Project planning, reporting.		Quizzes, short reports and presentations Journal entries on news articles and stories. Reflection on projects		Teacher-guided, self-assessments at the end of each term		3 rd term		X	100	
								Ave. of CW(%)		Ave. of CW(%)		
Yr.Schd.		Hrs.	Unit of Themes			Unit Goals			Unit of Evaluation Method			
1 st Sem	Mid-term	50	*The Goals in the news. *Energy sources *Life below water *Economy, society, environment *Experiments on energy *Project reflection/planning for 2021.			*Expanding SDG journals to daily individual presentations. *Looking at sustainable practices in our own communities *Forming project teams and plans for new projects in 2021			*Quizzes/presentations *Journals *Project planning *reports, project reflections.			
	Final											
2 nd Sem	Mid-term	50	*Schoolwide or Community Level Project- The students will form teams, choose a project related to the SDGs, plan it, implement it, report on results and reflect on successes and failures. *Life on land *Experiments on energy and resources. *Model United Nations			*Successfully completing a project (please note, success means seeing the project through, not necessarily the project showing favorable results.) Reporting on this project and reflecting on it. *ALL third year SDG students will be strongly urged to participate in some form in the Rits Uji MUN			Quizzes/presentation. Journals Project planning reports, project reports, project reflections.			
	Final											
3 rd Sem	Final	16	Project summaries, reflection and presenting to 2 nd year students.			The third-year students will be required to come up with a reflection on their work in SDG studies and deliver it in a speech to their juniors.			Course reflection in essay and presentation form.			
Remarks		Guest speakers are welcome and wanted to speak to students about SDG related issues. Field trips will be requested										

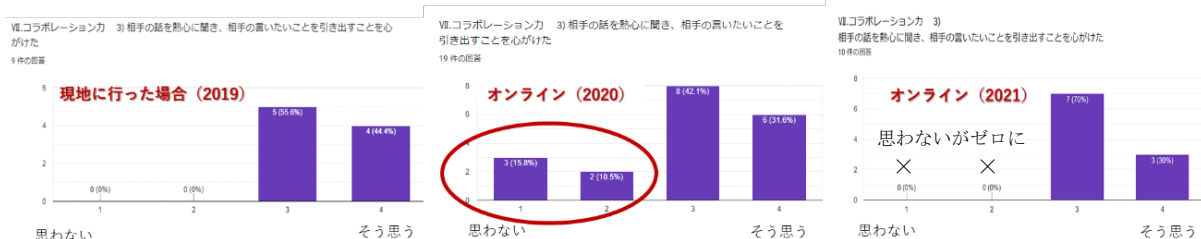
<IM コース>

留学帰国後の生徒には、学校設定科目として、Citizenship, Mathematics, Science for SDGs, International literature, Academic Communication, Theory of Knowledge の 6 科目をイマージョンで実施した。Academic Communication は Writing と Presentation の技術について学び、英語での学術論文の書き方に沿って、生徒は課題研究論文を作成した。それぞれの科目は、IB 同様に日本の助教諭免許を取得できた教員が担当している。

d1. カリキュラムに位置づけられた海外研修開発ーラオス

SGH 時代から継続され、年間 2 回のペース（夏実施は課題発見、冬は課題解決）で、ODA などを手がけている協働機関 IC ネット株式会社の協力を得て行われてきた。IM コースの授業 Global Leadership Studies と連動させて作り込まれてきたが、WWL になってからは、この研修を校内ではすべてのコースの生徒に、校外では連携校の生徒に開放し、一緒に行った。

本年度は、昨年に引き続きオンラインで実施したが、事情により 1 回の実施となった。昨年との改善点は、①首都ビエンチャンも訪ね、農村部との違いを知ること②事前学習でグループ学習を取り入れ、グループでの情報共有などがやりやすい環境を研修前に作ったことである。研修を連携校と共同で行うメリットを活かすことで、生徒にほどよい緊張感が生まれ、違った背景を持



つ他校生徒の新しい視点が加わるため、研修自体の質がさらに向上した。その結果、生徒のアンケート調査では、現地に行ったときに近い形になった(左:対面 中:昨年 右:改善後の今年)。研修日程は右表の通り。土日中心の日程とした。詳細は研究報告書第 4 章 4 (1) に示した。

事前研修 1月6日(木)	オリエンテーション	国内の参加者全員で集まり、自己紹介！事前学習の発表と、簡単なラオス語をみながら覚えて、少しでも海外研修中に使えるようになりましょう！
海外研修DAY 1 1月8日(土)	市場探検・ 現地高校生との交流	ラオスの文化・生活を知るために、ラオス最大級の市場を探検！ そのあと、同世代のラオスの高校生と異文化コミュニケーションにチャレンジ！
海外研修DAY 2 1月10日(祝・月)	伝統工芸品の 村を訪問	オンラインで伝統的な方法で竹細工を作る村を訪問。伝統工芸品がどのようなにつくられ、彼らの生活に根付いているか、村の様子を見たり、村の方にインタビューしながら理解しよう！
海外研修DAY 3 1月15日(土)	コーヒー農園訪問 ビエンチャン視察	ラオスには有名なコーヒー産地があります。産地へ行き、コーヒー農家にお会いしましょう。ラオスのコーヒー農家支援を目的としたチームが現地のコーヒー農家さんと対談する予定です。 この日は首都ビエンチャンとも繋ぎ、ラオス南部との違いも発見しましょう。
事後研修 1月23日(日)	振り返り	ここまでの学びを振り返り、今後のそれぞれの活動につなげましょう。

d2. カリキュラムに位置づけられた海外研修開発ーフィリピン

フィリピンでの海外研修は、IG コースの SDGs の授業と連動し、協働機関の認定 NPO 法人アクセスの協力のもとオンラインで行われた。そのコンセプトは、貧困層といわれる方の実態を自分の目で確かめ、生の声を聞き、貧困の構造を理解したうえで、自分たちのできることを考えるというものである。フィリピンの発展している面と都市部の貧困、今年初めて取り入れた農村地区の貧困をあわせて体験することで、貧困の原因が複雑であり、机上で考えていることとは違うことを知り、援助とは何かを真剣に考えるようにするというものとなった。この過程で、振り返りや質問を重視し、メンターを配置することで、日本人同士の中で言語化してから英語で質問するトレーニングが行われた。また、アクションにもこだわり、研修期間中に自分たちができることをグループで考え、それを現地の方に聞いていただき、評価を受けるようにした。日程は昨年より 1 日増やし、1 週間以上連続開催という厳しいものとなったが、連携校では、宮崎県立宮崎大宮高等学校、宮崎県立飯野高等学校、愛媛県立三崎高等学校、青翔開智高等学校からの参加があった。日程と内容は以下の通り。

- DAY 1 3月5日(土) 16:30~18:30 事前学習①
グループに分かれ事前課題を共有、グループで合体版プレゼンを作成、全体で共有
- DAY 2 3月7日(月) 16:30~18:30 事前学習②
参加者同士が仲良くなるワーク+スタッフ紹介
研修概要、訪問地、訪問相手紹介 アクションプラン作りまでの流れを理解する
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 3 3月8日(火) 16:30~18:30 都市スラム

- 都市スラム・トンド地区バーチャルツアー・スラム出身若者のライフストーリー
参加者同士で感想シェア・スラム出身若者と対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 4 3月9日（水）16:30～18:30 農村の中高生
農漁村ペレーズ地区バーチャルツアー・農村の中高生との交流
参加者同士で感想シェア・子ども若者支援担当 NGO スタッフと対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト*
- DAY 5 3月10日（木）16:30～18:30 農村でのフェアトレード
バーチャル・フェアトレード作業場訪問・フェアトレード生産者との交流
参加者同士で感想シェア・フェアトレード担当 NGO スタッフと対話（相互に Q&A）
グループに分かれてのチェックアウト
- DAY 6 3月11日（金）16:30～18:30 アクションプラン作り
ここまでの学びを踏まえて、フィリピンの人々が抱えている課題を特定
課題の解決のためのアクションプランをグループ毎に策定し、発表の準備をする
- DAY 7 3月12日（土）14:00～16:00 発表とフィードバック
グループ毎にアクションプラン発表・フィリピン側スタッフからフィードバック
Q&A・クロージングリマーク

最終のアクションプラン作りでは、それぞれのグループにメンターについてもらい議論を進めた。それぞれのグループには、同じ学校の参加者が混じらないようにしたが、互いの意見を尊重しながら一つのものを作り上げていくことを楽しんでいるように見えた。グループによってさまざまな視点があり、すべてのチームが違う提案になった。参加者は高校1年が多いため、本当にそれが現地で困っていることなのか、それを実現するための障害はどのようなことがあるかなどまで考えられないチームもあったが、フィリピンのスタッフに発表を聞いてもらい、意見をもらうことで、**Nothing about us without us** の視点が備わった。

詳細は研究報告書第4章4(2)に記載した。

e. 文理融合型カリキュラム編成

文系でも数学や理科を学ぶことのできるなど、柔軟性のある文理融合カリキュラムが WWL で求められていた。WWL に先行して決定していた拠点校におけるカリキュラム改革は、まさにその学びを実現できるものであった。

高校1年では、理科を「科学と人間生活」とし、人間生活と科学全分野との関係を探学的な学びで深めた。コア探究の授業は文理融合教育の要として置き、様々な課題解決のためには、文理を問わない力が必要であることを体験させ、今後の学びにつなげる取り組みとなった。

高校2年では、英語で探究活動を行う学校設定科目 SDGs I を配置し、第二外国語や文学総合などを選択で履修できるようにした。

IG コース

学年\時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	EX
1 年	保健	体育	国語総合				現代社会			数学Ⅰ			数学A		科学 と 人間生活	社会 と 情報	芸術Ⅰ		コミュニケーション英語Ⅰ			PESⅠ			家庭基礎		コア探究		HR	土曜講座	
2 年	保健	体育	日本語Ⅰ	日本史A	世界史A	数学Ⅱ				SDGs1 数学B 倫理 政治・経済			化学基礎		物理基礎 生物基礎		芸術Ⅱ 第二外国語 文学総合 PDEnglish	コミュニケーション英語Ⅱ			PESⅡ			コア 探究	HR	土曜講座					
3 年	体育		数学Ⅲ				物理探究 化学探究 歴史探究				SDGs2 文科探究 物理/化学/生物			文化と表現 芸術探究 統計学 プログラミング 簿記			コミュニケーション英語Ⅲ			PESⅢ		コア探究		HR	土曜講座						
日本語Ⅱ				数学総合																											

※PES: Productive English Skills

※赤字は文理融合カリキュラムを特徴づける科目

IM コース

※コア探究：総合的な探究の時間は特例で総合的な学習の時間に読み替え2018年度から研究開発学校として研究開発を開始

学年\時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	EX
1 年	保健	体育	国語総合				現代社会			数学Ⅰ			数学A		科学 と 人間生活	社会 と 情報	美術Ⅰ		コミュニケーション英語Ⅰ			英語表現Ⅰ		英語特修	家庭基礎			総合	HR	土曜講座		
2 年	保健	体育	日本語Ⅰ				日本史A		世界史B			数学総合			化学基礎	美術Ⅱ		コミュニケーション英語Ⅱ			英語表現Ⅱ		TOK		総合	HR		土曜講座				
3 年	体育		日本語Ⅱ (小論文)				Citizenship (社)			International Literature (Reading)			Academic Communication (Writing & Presentation)			Mathema tics	Science for SDGs		第二外国語			TOK		課題 研究 GLS		HR		土曜講座				

※TOK IBの基幹科目のTheory of Knowledgeに由来

※網掛けはイマージョンまたはネイティブ教員担当授業

高校3年IGコースでは、全員が探究活動を含む物理・化学・生物各5単位より1科目を選ぶことを可能とした。理科には探究活動を重点的に含む5単位の科目と含まない4単位の科目を設置した。理科を重点で学びたい生徒は、探究を含む科目に加え、物理・化学・生物から1科目4単位をさらに選べるようにした。それ以外の生徒は、SDGsⅡや文科探究を選択できる。その他の選択科目群では、文化と表現・芸術探究・統計学・プログラミング・簿記など多様な科目から選択できるようにした。また、数学Ⅲと同じ選択群には、日本語Ⅱ＋数学総合をセットで置き、高校3年の文系の生徒にも数学Ⅲもしくは数学総合のどちらかを必ず学ぶ機会を置いた。コア探究やGLSなど、連携機関や連携企業との取り組みを含む科目については「**b. 大学、企業、国際機関と協働で行ったカリキュラム開発**」の項に、SDGsの授業については「**c. 外国語を用いて行う文理融合探究科目のカリキュラム開発**」の項に示した。

IMコースでは留学から帰国した生徒のために下記カリキュラムのようにイマージョン授業を多数配置し、Science for SDGsなどの学校設置科目を置いた。

f. 学習活動が構想目的達成に資するように工夫した取り組み

コロナ禍において、学びを止めないことを優先し、国際会議や海外研修等の取り組みをオンラインで実行した。むしろ、コロナ禍が大きなハードル（課題）となったが、その課題を解決するための工夫や新しいアプローチを教員と生徒の両方が意識して乗り越えた。

引き続き、コア探究のような学ぶための基礎体力をつける科目、興味を発展させ探究する科目など、生徒の成長に合わせた科目を適切に分類、配置することを意識した。ラオスやフィリピンの研修では、校内対象をIGコースにも広げ、連携校とも合同で行った。オンラインのメリットとデメリットを整理でき、今後のハイブリッド型開発に向けた経験となった。

生徒の興味を引き出し次へのステップへのハードルを下げる取り組みとして、海外連携校との純粋な交流のプログラムを日常的に行うことは始まったばかりであるが、国際委員会の取り組みの強化などから海外研修、国際会議など様々な取り組みを段階的に配置することで、すそ野を広げることとトップアップの両方を意識して設計を行った。

連携機関や連携校には、情報共有を行い、WWLのコンセプトを十分に理解いただき、積極的な関与をいただいた。国際会議等のファシリテーターを務めていただいた企業や団体の方からは、混ざる面白さに気が付いた、高校生の実力は捨てたものではなく将来に希望が持てたなどの意見をいただいた。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修

立命館宇治高等学校を拠点校とするALネットワークは全国型であるため、スポット講義型、集中講義（研修型を含む）、Web配信型などを想定し、調整を進めてきた。昨年度から計画してきた、APU学生向け海外研修をAP科目とする件は、コロナ禍における海外渡航の制限により、実施できなかったが、制限が解けた後に実施したい。

h. より高度の内容を学びたい高校生が学習できる環境整備

カリキュラム中に、統計学、プログラミング、簿記、文科探究、第2外国語など専門科目が選択できるようにした。学校法人立命館主催の英語トップアップ講座はオンラインに切り替えて実施された。高校3年の1月から3月にカナダのUniversity of British Columbia（UBC）に留学する制度は、昨年度にオンラインで生徒が集まらなかったため中止となった。次年度以降再開する方向で調整中。ALネットワーク連携校の参加できる海外研修や国際会議関連もオンラインで実施し、その特性を活かし、講演会を増やすなど学ぶ機会を拡大した。

i. 留学生の受入の学校体制

拠点校の立命館宇治高等学校では、留学の出入りにかかわる分掌「国際センター」を組織しており、センター長の教員、職員1名、部員として教員5名を配置した。受け入れにおいては、国際センターが中心となり、配置クラス、時間割等を作成し、日本生活に慣れるためのサポートも行った。長期の留学生については、様々な場でプレゼンテーションを行う機会が設けられ、アジア高校生架け橋プロジェクトの生徒達が、全国高校生フォーラムに出席し、WWL研究報告会などでのプレゼンテーション、Global Youth Fairでのグループリーダーなどを行った。

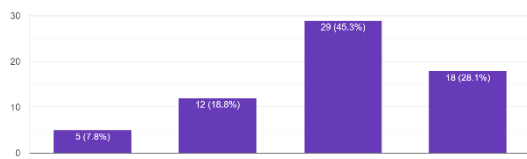
j. 特筆すべき点

＜コア探究が教科を越えた教員の繋がりの方に＞

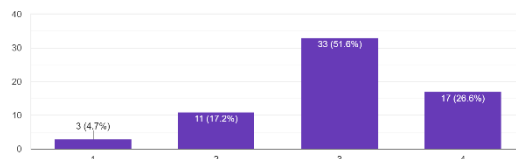
昨年同様、コア探究カリキュラム作りは、学年会を中心とした運営とし、年次進行により高

校全学年に広がった。週1回の学年会議の場で授業の状況や進め方を細かく確認でき、生徒の成長に寄り添った授業実践ができた。また、教員自身も、他教科の教員と共に授業実践をすることで、他教科の狙いがわかるなど、相互理解にもつながった。当初、負担の大きさから根を上げていた教員も、生徒の変化と同時に、教員にとっても価値があるものと気がつき、教科教育の改善にもつながった。このような教員の変容により、「学習する組織」が形成され、「他教科の学びを知る」ことで高等学校の学びを俯瞰でき、「教科の指導内容」の高度化と「授業力向上」により生徒の学びの質が向上した。生徒の力量も確実にアップしており、対外的な成果にもつながっている。以下の教員への調査結果からもわかるように、特に探究の学びへの教員の理解及び期待が高まっている。

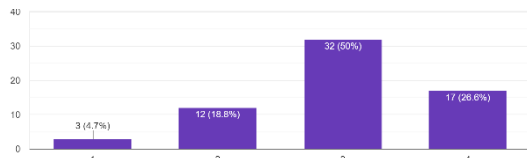
WWLの取り組みによる本校生徒への好影響を実感できましたか？ Did you feel the positive impact of the WWL initiative on our students?



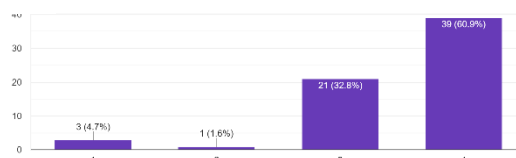
この3年間の取り組みによって、本校の探究学習は進んだと思われますか？ Do you think that our school's inquiry-based learning has progressed as a result of these three years of activities?



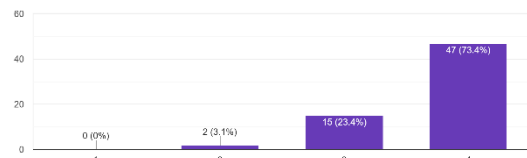
この3年間の取り組みによって、社会と生徒のかかわりが進んだと思われますか？ Do you think that the school's efforts over the past three years have improved the relationship between students and society?



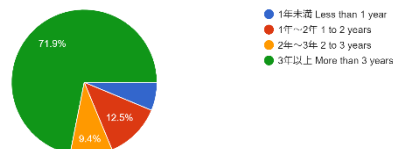
今後も探究学習を推進していくべきと思われますか？ Do you think that inquiry-based learning should be promoted?



今後も生徒と社会とのかかわりを推進していくべきと思われますか？ Do you think that we should promote the relationship between students and society?



本校でのご勤務年数 Years working at the school



<コロナ禍によっても教員力量がさらにアップ>

単にオンラインツールの使用が進んだだけでなく、教員が自主的にコロナ禍における打開策を話し合った。前項同様に教員自身のカリキュラムマネジメント力量がアップした。

<一つの学校という垣根を越えた学びあい>

本年度も、混ざることによる化学反応が良い方向に向かった。これは、生徒だけでなく教員もそうであると昨年、一昨年に報告したが、全国高校生 SR サミットや Global Youth Fair に協力いただいた社会人メンターの方からも国内外の高校生の学び合いに日本の高校生の未来を確信したとの感想をいただいている。他校の教員や連携企業・団体の方との日常的交流がさらに進んだ。このような枠組みの中で、教育論議ができる点は、教育活動に大きなプラスである。

<ビデオを評価に活用する取り組み>

検証委員会における昨年度の意見をもとに、次の2タイプのビデオ活用を昨年に続き行った。コア探究においては、生徒の発表の様子をビデオで蓄積した。

① 生徒評価に活用

生徒の最終プレゼンテーションを動画で提出させ、評価やアセスメントに活用した。

これらの動画によって、ループリックの精緻化をした。また、それぞれの評価に該当するサンプルを分類しておくことで、新しい担当が評価するときの参考となり、評価のブレをなくすることができる。また、生徒にとっても、優秀作品を観ることで目標設定になる。本年度はコア探究だけでなく他の科目でもこの手法がとられる科目がでてきた。

② 目標となる先輩像・自己評価時に基準となる生徒像

プロジェクトで成果を上げた生徒とその周囲も含めて取材をし、なぜそのプロジェクト

が成功したのか、そのプロジェクトを行ったことでどのような力が伸びたのかがわかるようにした。本年度は2本のビデオを作製した。このビデオは、入学当時に目標となる先輩像を示し、卒業前には自分の成長を自己評価する際の基準として使うことを意識している。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材育成状況

○国際会議

拠点校の構想計画書の目標に、連携校参加のもと3種類の国際会議の開催があったが、すべて達成した。それぞれの会議で伸ばす生徒の力を設定し、探究系授業や各種研修等も含め、その経験を積むことで、最終型の Global Youth Fair 開催につなげるというものであった。それぞれの会議で伸ばす生徒の力は以下の通り。

- ・World Youth Meeting：イニシエーション型。一つのプレゼンテーションを大会テーマに沿って海外の学校とペアになって作るため、協働を体験しコンフリクトを乗り越えるコミュニケーション力を養成するとともに、プレゼンテーションの技術を磨く。

- ・SR サミット FOCUS は、探究の授業で作上げたプロジェクトを社会人メンターや他校の生徒と揉み上げていく。その過程で様々な視点を学び、協働する重要性と面白さを経験するとともに、プロジェクトの意味や社会とつながることの重要性を認識。さらに、プロジェクト実行の過程で障害の乗り越え、成功につなげる。

- ・Global Youth Fair：WWL の学びを体験した生徒が企画運営する会議。3年間の WWL の学びを経験した生徒がその集大成としてどこまでできるか真価が問われる会議。会期中にディスカッションやワークショップを行い、共同宣言等を出す。この国際会議では英語力、問題解決能力、異文化コミュニケーション力の全てが求められ、参加者の国際通用性をさらに高めることを期待する。これにより AL ネットワーク全体でより高いレベルのグローバルリーダーの育成を目指す。

構想計画書に示した通り、WWL の3年間の学びを経験した生徒が主体的かつ独創的に会議を計画、運営した。運営では、他の学年や学校全体から実行委員を募集し、周りを巻き込んで成功に導いた。詳細は、7(2) b および研究報告書第3章に記載した。

○探究系の学び

IG コースコア探究及びそのほかの探究系の学びにより、全員に課題研究論文、Learning Story、プロジェクト実施報告のいずれかを提出させることができた。コロナ禍のオンライン授業期間にも、自主的にプロジェクトを進め社会貢献するものが多数出るなど、生徒の変容が見られた。詳細は、7(2) b・c および研究報告書第2章および別冊に記載した。

○対外的なコンテスト等の成果

探究の学び、社会とのつながり、フィールドワーク、海外研修、国際会議など、すべての学びの結果として、以下のように3件の全国一を本年度だけで獲得した。

ボンズチーム（IG コース） “廃棄苗を子供たちの教育のツールにすること”

CHANGE MAKER U-18 未来を変える高校生日本一決定戦（テレビ東京・電通主催）
農林水産省大臣官房技術総括審議官賞（優勝）

Radiant チーム（IG コース） “Radiance stick～一人一人が輝ける社会を目指して！～”

「Japan Challenge Gate2022 ～全国ビジネスプランコンテスト～」 （中小企業庁主催）
経済産業大臣賞

GYF SURVIVE 実行委員会チーム（IM コース） “Global Youth Fair SURVIVE”

全国高校生フォーラム（文部科学省主催） 文部科学大臣賞

※全国高校生フォーラムでは連携校からも生徒投票賞（長崎東高等学校）と審査員長賞（宮崎大宮高等学校）

<リテラシー、資質・能力（コンピテンシー）>

SGH 指定期間と比較するため、本校が用いていたオリジナルの質問で調査した。その結果を次ページ上に示す。これにより WWL の特徴を明らかにすることができた。実践の赤線が WWL の高校3年生1月、一点鎖線の紫色の線が SGH 最終年の3年生1月である。全体的に WWL での伸びが SGH 時代を上回っているが、WWL での伸びが顕著だったのは以下の3点。

- ・ミーティングやチームにかかわる能力が目立って伸びている。

社会とのかかわりの増加、PBL 型学びの定着、研究やプロジェクト実施等の効果と思われる。

- ・自ら学ぶスタンス、情報収集や文書作成能力などのリテラシーが伸びている。

探究系の授業及び教科との連携での基本的スキルの学びと実践によると思われる。

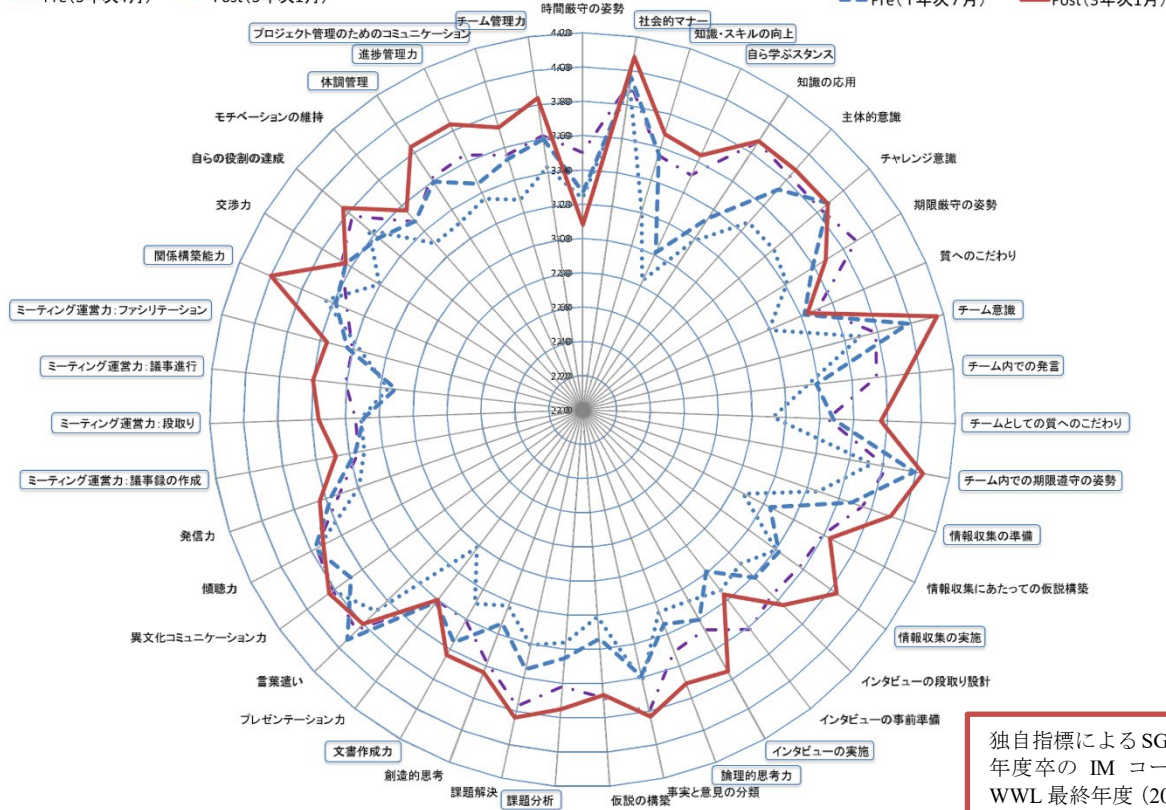
- ・論理的思考や課題分析 同上。

SHGの効果(2年4月・3年1月の比較)
 <生徒の自己評価>

.....Pre(3年次4月) - - - Post(3年次1月)

高校1年ー高校3年比較
 <生徒の自己評価>

--- Pre(1年次7月) --- Post(3年次1月)

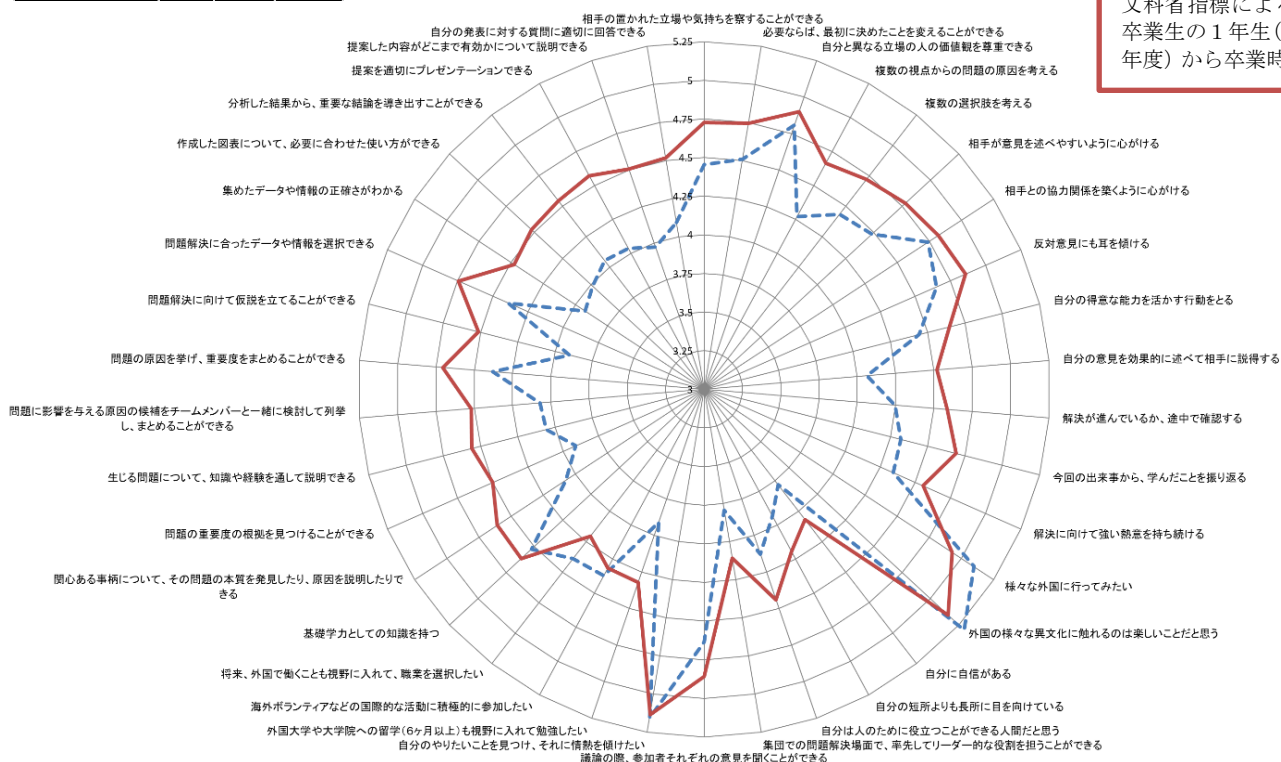


独自指標によるSGH時代(2018年度卒のIMコース生徒)とWVL最終年度(2021年度卒のIMコース生徒)の比較

	1年	3年	増加率
コンピテンシー	4.44	4.71	106
マインド	4.41	4.52	103
探究型行動	4.10	4.57	111

高校1年ー高校3年比較
 <生徒の自己評価>

--- Pre(1年次7月) --- Post(3年次1月)



<心構え・考え方・価値観等, 探究スキル等>

前ページ下図に、文部科学省の指標によるアセスメント結果を示した。WWL 指定最終年度の3年生は、WWL 指定初年度には高校1年生であった。この両時期の調査結果を比較した。

マインド全体の増加率が最も低く、特に「海外に行きたい」、「海外の文化に触れるのは楽しい」、「海外で働く」などについては、逆に数値が下がってしまった。マインドに関しては、高1時点でもともと高い数値であったことと、コロナ禍で海外に行けなかった経験などが影響していると思われる。

しかし、自己肯定にかかわる「自信がある」、「調書に目を向ける」、「人のために役立つことができる」等の質問事項は高い伸びを示している。これは、探究やPBL型の学びで、小さな成功体験を積み重ねることができたことによると考えられる。

コンピテンシーにも一定の効果が見られ、特に探究型行動にかかわるスキルが最も高い伸びを示した。

b. AL ネットワークの果たした役割

事業協働団体は、国際会議等でのメンターやスペシャリストとして、全国高校生SRサミットのリーダー合宿のように一定の業務を分担する役割、World Youth Meeting では運営メンバーの一員としてなど、多方面で協力いただいた。さらに、ラオス、フィリピン、ハワイでの海外研修のほか、FLAG のようなPBL型の学びの場の創出を協働で行った。

連携校は、それぞれの学校が主催する取組に相互に乗り入れるなど、それぞれの学校の不足する部分を補うほか、大きな取り組みでは一定の業務を分担する役割を演じてもらった。2年目のコロナ禍最初のオンライン授業開始時期には毎週勉強会をオンラインで開催し、情報・事例共有やアイデア交換などが行われたことに代表されるように、研究会やネットワーク推進会議、メーリングリストのほかZoom等を使って日常的にカリキュラム議論が行われた。

連携校の生徒たちは、全国高校生SRサミットに代表されるように、海外研修ほか、様々な取り組みで「混ざる」面白さと重要性に気が付き、お互いに影響を与え合う関係が構築された。その関係構築に重要な役割を演じていただいたのが、立命館アジア太平洋大学の国際学生や協働機関の皆さんである。また、交流が進むにつれ、学校を超えての目標となる（あこがれる）先輩や同級生が存在するようになり、それを目標にして頑張る姿がみられた。様々な取り組みで知り合った生徒たち、事業協働機関の関係者の方たちとの関係を継続させ、お互いのプロジェクトの協力者や相談相手になるなど、協力し合うコミュニティが形成された。

c. 設定した中期目標（2021年度末）への到達

<短期目標(報告済)>

留学生増加についてのみコロナ禍において達成できなかったが、海外連携校とのオンラインの取り組みが開始されるなど、今後に向けての布石を置くことができた。その他のカリキュラム開発、国際会議、AL ネットワーク参加団体数、成果報告会実施など、すべての目標を達成した。

<中期的目標（2～3年）>

各目標について個別に達成状況を記述する。

- ・2020 年度当初より、IG コース3 年で文理融合型カリキュラムを開始し、大学の学びにつながる探究心を育成するIG コースカリキュラムの完成。 ⇒ ◎ 達成した
- ・2020 年度中に、総合的な探究の時間(コア探究)、SDGs 等の学校設定科目のカリキュラム開発を終える。 ⇒ ◎ 達成した
- ・2020 年度当初より、土曜講座の形で生徒の興味関心に沿った様々な講座、特にデータマイニング、マイプロジェクト等の高度な内容も含めて開設する。 ⇒ ○ ほぼ達成した
コロナ禍の影響で土曜講座の時間が十分に持てず、データマイニングなどの一部講座を設置できなかったが、IM コース GLS やマイプロジェクトなどのさまざまな取り組みが行われた。
- ・大学の正課研修に参加した生徒は、AP 受講生として単位認定できる仕組みを構築する。 ⇒ △ 今後達成の見込み
コロナ禍において実際の実施には至っていないが、立命館アジア太平洋大学との間で、大学の夏期海外研修をAP化していく方向性は確認している。
- ・AL ネットワーク、国内大学3校、国内高校15校、海外高校6校、法人・NPO 5団体、グローバル企業5社をめざす。 ⇒ ◎ 達成した。

- ・AL ネットワーク参加校に、AL ネットワークで開発した海外研修に参加枠を広げる。
⇒ ◎ 達成した
- ・2020 年度中に、新規国際会議を開催する。 ⇒ ◎ コロナ禍で 2021 年度にずれ込んだが達成した
- ・模擬国連を開催する。徐々に参加校を AL ネットワーク連携校等を広げる。
⇒ ◎ 達成した
- ・中長期留学生受入数 20 名に、海外短期研修及び海外校短期交換プログラム等派遣 250 名、受入 150 名をめざす。・連携校に中長期の留学生受入体制を構築。 ⇒ △ 代替措置実施
準備は進めてきたが、コロナ禍のため達成できなかった 対面交流開始後再度目指す。
代替措置としてオンラインの交流などを企画した。

<長期的目標（4～10 年）>

各目標について個別に達成状況を記述する。

- ・AL ネットワーク連携校すべてから、海外大学進学者を輩出する。
立命館各附属校 4 校、市川高等学校、聖光学院高等学校、青翔開智高等学校、長崎東高等学校、安芸府中高等学校などですでに実績があり、今後も増加が見込まれる。
- ・AL ネットワーク連携校（立命館附属校除く）から、国内 SGU 指定大学・海外大学への進学者を卒業生あたり 50%以上まで引き上げる。
連携校でもありそれぞれが拠点校でもある宮崎大宮高等学校、長崎東高等学校を中心に、WWL の学びが進路に大きな影響を与えており、生徒のやりたいことができる大学に進学することで、結果が付いてくる形になっている。連携校においても、混ざる学びによって、海外に進学を決めた他校の先輩や同年代の生徒が目標になる憧れの生徒になるなど、良い影響を及ぼしあっている。
- ・AL ネットワークで取り組んだプロジェクトから、新しいビジネスモデルが創出される。
すでに卒業生(2019 年度卒：全国高校生フォーラム審査員長賞受賞)に、ラオスコーヒーにかかわるビジネスで大学在学中に起業したものがいる。探究の学びが高度化され、ビジネスコンテストにおいての入賞、優勝が、拠点校だけでなく連携校にも複数生まれているため、今後も増えることを期待している。次項にある“FLAG”もこれらを後押しすることになる。
- ・AL ネットワーク参加校共通の科目が創設され相互乗り入れの授業が展開されるなど、WWL の取り組みが広がり、拠点校を中心に高校生へ高度な学びを提供する仕組みが構築される。
課外活動としての共通の学びの場“FLAG”は実現した。FLAG では、探究の学びを高度化し、自分たちのプロジェクトを実現するための、大学生のサークルのような組織を作り、合計 15 回の専門家からの講義やワークショップを受けた。それぞれの学校単独ではできないこと、不足していることを補い合うことなど、メリットを十分に活かすことで、実現の方向が見えてくる。

9 次年度以降の課題及び改善点

この 3 年間の取り組みで広がったネットワークをもとに、AL ネットワークを大事に育てていきたい。AL ネットワーク内では、取り組みの運営を分担するなど、自立して運営するための実験的取組を行ってきた。それらを拡大すれば、今後も発展させることができると考えている。

With Corona のフェーズが進行することが見込まれており、対面で実施する取り組みが増えてくるものと予想している。オンラインとオフラインのそれぞれの特性、例えば、オンラインの機動性と参加しやすさ、オフラインの身を持って五感で体験したり直接対話したりすることで得られる経験など、両方を活かしたハイブリッド型の取り組みを開発していきたい。

Web 公開資料：研究報告書第 3 年次、コア探究実施報告書、第 3 回 WWL 研究報告会資料集、生徒の成長にかかわる動画等

【担当者】

担当課	一貫教育部一貫教育課	T E L	075-813-8218
氏 名	小笹 大道	F A X	075-813-8219
職 名	副部長	E-mail	hiromiti@fkc.ritsumeai.ac.jp

